外国語教育メディア学会（LET）中部支部

外国語教育基礎研究部会 第４回年次例会

発表プログラム・予稿集

日時　2016 年 12 月 17 日（土） 10:20-18:00

会場　名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス 西館

〒461-0048 愛知県名古屋市東区矢田南 4-102-9

主催　外国語教育メディア学会（LET）中部支部 外国語教育基礎研究部会

例会サイト：　http://bit.ly/Kisoken2016

Twitter ハッシュタグ：　#kisoken2016

お問い合わせ先：

外国語教育メディア学会（LET）中部支部

外国語教育基礎研究部会 事務局

川口 勇作（名古屋大学大学院生）

y.kawaguchi@nagoya-u.jp

ごあいさつ

第 4 回年次例会に寄せて

田村 祐

外国語教育メディア学会（LET）中部支部 外国語教育基礎研究部会 部会長・
名古屋大学大学院生

本日は、外国語教育メディア学会中部支部外国語教育基礎研究部会（以下、基礎研）の第 4 回年次例会にお越しいただき、誠にありがとうございます。

これまで、基礎研の年次例会は毎年 2 月末に開催されてきましたが、今年度は 12 月に年次例会を開催する運びとなりました。これは、部会運営の都合によるものです。年末の大変忙しい時期の開催となったことをお許し下さい。また、本年度の例会はジャニーズ事務所所属の嵐のコンサート開催日と重なり、会場周辺の混雑や、宿泊場所の確保が困難となってしまうなど、参加者の皆様には多大なるご迷惑をおかけしていることを重ねてお詫び申し上げます。

本日の会場となっている名城大学ナゴヤドーム前キャンパスは、交通アクセスも良く、また、2016 年 4 月にオープンしたばかりの大変新しい、そして綺麗なキャンパスであります。このような素晴らしい会場を、私ども基礎研の年次例会会場として使用できるようご配慮くださった、名城大学の西尾由里先生に、心より感謝申し上げます。

さて、今年度の例会は、午前中にシンポジウム、午後にはワークショップと自由研究発表、夕方からは基調講演と、盛りだくさんの内容となっています。「若手研究者が考える四技能指導の理論と実験」と題したシンポジウムでは、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングのそれぞれを専門とする新進気鋭の若手研究者をお招きし、英語授業の理論と実践についてお話いただきます。ワークショップでは、講師の草薙邦広先生（広島大学）に話題提供をしていただいた後、今後の外国語教育研究の方向性やアプローチについて、参加者同士で活発な議論が行えればと考えています。自由研究発表枠では、実践報告 1 本、展望 1 本の発表があります。今年は、会場を 1 つの部屋とすることで、参加者全員がすべての発表を聞くことができるようにしました。発表者の方々にとってこの機会が有益なものとなるよう、活発な質疑が行われることを期待しています。夕方の基調講演では、関西大学の竹内理先生をお招きし、外国語学習における動機づけ研究を取り上げ、さまざまな角度からお話いただきます。ご期待ください。なお、本例会のシンポジウムと基調講演につきましては、リアリーイングシッリュ株式会社様のご援助をいただいております。御礼申し上げます。

私ども基礎研も、発足から 4 年目を迎えました。発足当初からは運営に携わるメンバーも大きく変わりましたが、それでも週例会と称した勉強会を毎週開催し、こうした年次例会の開催、年度ごとの報告論集の発行を行えていますのも、ひとえに皆様のあたたかいご支援のおかげと、心より御礼申し上げます。皆様のご期待に沿えるよう、これからも邁進してまいりますので、今後とも変わらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

プログラム

10:00-

受付（2 階 DW レセプションホール前）

10:20-

開会式（2 階 DW レセプションホール）

司会： 西村 嘉人（名古屋大学大学院生）
挨拶： 田村 祐（外国語教育基礎研究部会 部会長）

10:30-12:30

シンポジウム（2 階 DW レセプションホール）

提供：リアリーイングリッシュ株式会社
http://www.reallyenglish.co.jp/

若手研究者が考える四技能指導の理論と実践

コーディネーター：石井 雄隆 （早稲田大学）

専修大学附属高等学校英語科講師を経て、現在、早稲田大学・大学総合研究センター教育方法研究開発部門に所属。統計教育プログラム開発・アクティブラーニング推進・教育ビッグデータ解析などの業務を担当している。第 27 回「英検」研究助成入選、2016 年度外国語教育メディア学会新人奨励賞。主な著書として Data Mining and Learning Analytics: Applications in Educational Research（Wiley & Blackwell）など。

シンポジスト： 長谷川 佑介（上越教育大学）
山内 優佳（広島文化学園大学）
福田 純也（静岡県立大学）
川口 勇作（名古屋大学大学院生）

英語教育における四技能の指導の在り方について、近年盛んに議論されています。本シンポジウムの趣旨は、四技能それぞれの分野の研究をされており、大学の英語教育に関わり始めたばかりの若手の先生方に英語の授業の実践例をお話しいただきます。その中で、実践の根拠となる理論にも触れていただくことで、実践を組み立てるためのヒントを参加者と共有し、望ましい四技能の指導の在り方について議論できればと考えています。

リーディングの観点から：“リサイクル”を意識したリーディング授業の設計図

長谷川 佑介（上越教育大学）

筑波大学大学院人文社会科学研究科修了、博士（言語学）。2012–2014 年度日本学術振興会特別研究員。現在は上越教育大学専任講師。専門は英語教育学で、英語学習者の語彙学習と文脈の読みに関する研究を行っている。受賞歴として、2013 年度日本言語テスト学会最優秀論文（2013 年、*JLTA Journal* 16 号、単著）、平成 23 年度全国英語教育学会学会賞（2011 年、*ARELE* 22 号、共著）など。

英語で授業を進めることが基本とされている現在でも、大学生の多くが文法訳読型の英語授業を高校時代までに経験している。しかし、「英語リーディング＝英文の和訳作業」という固定観念を抱かせたまま彼らを社会に送り出してしまうわけにはいかない。特に勤務校のような教員養成大学にあっては、多様な授業方法を体験させることで学生の視野を広げさせる必要がある。私の英語リーディング授業では、予習は一切させず、授業中にも和訳作業は行わない。教師が行う説明の時間を可能な限り減らし、その代わりに英文素材を繰り返し利用する（リサイクルする）ことで、読みにかける時間を出来るかぎり増やしている。また、大学ではあまり実践されていないと思われる音読活動も積極的に取り入れている。本発表は、出来るかぎり理論的な背景や実証研究からの示唆と関連づけながら、日ごろ実践している取り組みを紹介して忌憚のない意見を乞うものである。

リスニングの観点から：課題の発見ができる学習者の育成を目指した英語リスニング指導

山内 優佳（広島文化学園大学）

平成 28 年 4 月より、広島文化学園大学学芸学部で講師を務める。個人差に関する研究に興味をもち、学習者の方略使用（言語学習方略、リスニング方略）や情意面（外国語リスニング不安）に関する調査研究や指導実践を行っている。近年は英語リスニングの指導による効果の検証に関心があり、特に、音声による単語認知能力について研究を行っている。また、共同研究で語用論（ポライトネス）研究や小学校英語教育に関する調査にも関わっている。

現在、「確かな学力」や「アクティブ・ラーニング」といったキーワードの下で、学習者が自ら課題を見つけ、解決に向かって能動的に学習することが重要視されています。しかしながら、リスニングは音声言語を扱うその性質上、学習者自身がリスニング上の課題を明らかにすることは難しいといえます。発表者の実践においては、種々の活動（大まかな内容理解→キーワードの聞き取り→日本語訳による意味理解→ディクテーション等による聞き取り）それぞれにおいて、注目すべきリスニングの下位技能を学習者に伝えています。また、リスニング中に課題（つまずき）が生じるよう、やや難易度が高い教材を使用するようにしています。「難しい」から「こうしたら理解できるようになった」への過程を授業内で積み重ねることが、授業外においても学習できるアクティブ・ラーナーの育成につながると考えています。

スピーキングの観点から：タスクを用いた英語スピーキング授業の実践

福田 純也（静岡県立大学）

静岡県立大学特任助教。おもな研究対象は第二言語習得における意識の役割、タスクを用いた言語指導法など。2016 年に名古屋大学より博士号を取得。日本学術振興会特別研究員、名古屋外国語大学・名古屋造形大学非常勤講師を経て現職。2015 年外国語教育メディア学会新人奨励賞受賞。おもな著作として Effects of task repetition on learners' attention orientation in L2 oral production（*Language Teaching Research*）、Potential methodological biases in research on learning without awareness（*Applied Linguistics*）など。

本発表では、発表者の勤務校で行った、タスクを用いた英語スピーキング授業の実践について報告する。まず、授業を実践するにあたり事前に設定する目的・目標および評価方法を、どのような観点から考慮し、その目標に到達するためにどのように教育的タスクを配列したのかを報告する。その際には、実践の根拠となる「タスクを用いた言語指導法（task-based language teaching）」の理念を説明し、その理念が、先行研究において実践にどのような示唆を与えるといわれてきたかを示しつつ、実践に導入する際に発表者が役立ったと感じた、もしくは困難を感じた点について述べる。そののち、授業開始時からはどのような点に留意し、変更を行いながら授業の実践を進めたかについて、学生の様子を述べながら報告する。

ライティングの観点から：学習支援システム上でのフォーラムライティングの実践事例

川口 勇作（名古屋大学大学院生）

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 博士後期課程在籍中。専門は外国語教育で、特にコンピュータを用いた外国語学習・教育の効果や実践、英語ライティングのプロセスや方略、外国語教育研究における質問紙の利活用などに関心がある。*Language Education & Technology*（外国語教育メディア学会機関誌）などの学術誌に論文を発表している。

報告者は、国立大学の 1 年生を対象とした英語コミュニケーションの授業で、授業外の学習活動として学習支援システム上のフォーラム（掲示板）でのライティング活動を実施している。フォーラムライティングは非同期的コミュニケーション手段であり、チャットなどの同期的コミュニケーションと比較して、プランニングや推敲の時間が十分に取りやすく、また書き込む前に他の学習者が書いた内容を参照できるため、他の学習者の文章スタイルや表現などを参考にすることができる、といった利点がある。本報告では、今回の実践の詳細や、実践上の課題を紹介した上で、学習者のライティングに対する不安などを中心とした、ライティングに対する意識の変化に着目した観察の展望を報告する。

13:35-14:35

ワークショップ（2 階 DW レセプションホール）

認知科学化した外国語教育研究とその後の方向性

講師： 草薙 邦広（広島大学）

広島大学外国語教育研究センター特任講師。名古屋大学大学院、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学非常勤講師、日本学術振興会特別研究員を経て現職。専門は行動計量的・数理的アプローチによる外国語教育研究。研究方法論と統計解析に関する新進気鋭の若手研究者と知られ、当該のテーマに関する講演、ワークショップ、セミナーなどを多数経験。

外国語教育研究の歴史を眺めてみると、その時々において、数多くの研究者があるひとつの方向へ一斉になびくことが何度かありました。1990 年代から昨今に続く大きな流れのひとつは、認知主義（cognitivism）とよばれるアプローチで、この時代の研究における主翼でした。ですが、昨今に至り、この認知主義はさまざまな批判を受けるようになりました。さらに、2010 年以降では、（a）社会構築主義、ポスト認知主義、複雑系、そして創発主義の台頭、（b）統計改革、再現可能性問題、そして統計手法の高度化、（c）エビデンスにもとづく教育政策、（d）学力観・熟達度観の変遷、といった複雑な動きが見られ、我々の方向性は、ますます見渡しにくくなっています。

そこで、本ワークショップでは、講師による話題提供の後、外国語教育研究の今後のあり方、そして参加者自身のアプローチについて、グループワーク形式で活発な意見交換を行い、さらにグループ内の意見を全体でまとめて発表してもらいます。日頃、研究の哲学的な部分について議論を行えないご多忙な先生方、研究のあり方に漠然とした悩みを感じる院生・学部生、そして研究アプローチに関心のあるすべての方々の参加をお待ちしております。

14:45-15:50

研究発表（2 階 DW レセプションホール）

14:45-15:15 実践報告

The Implementation of the Peer-review Activity Focusing on 5W1H Questions: An Approach to Improving Students' Writing Performance.....1
TSUJI, Kayo（Ritsumeikan University）

15:20-15:50 展望

言語リズム類型論の変遷と第二言語リズムの測定.....2
天野 修一（静岡大学）

16:00-17:50

基調講演（2 階 DW レセプションホール）

講師紹介:　川口 勇作（名古屋大学大学院生）
提　　供:　リアリーイングリッシュ株式会社
http://www.reallyenglish.co.jp/

外国語学習の動機づけを探る
動機づけ要因、動機づけ方略、情意要因との関係を通して

講師:　竹内 理（関西大学）

関西大学大学院外国語教育学研究科・外国語学部 教授。博士（学校教育学）。第 11 代外国語教育メディア学会会長（2010-2016 年）。専門分野は、英語教育学（学習方略、学習者要因）と外国語教育におけるメディアの利用。2004 年度大学英語教育学会 (JACET) 学術賞、2005 年、米国モントレー大学院創立 50 周年記念「顕著な活躍のあった同窓生」賞（GSLEL 部門）、2008 年度第 4 回マルチメディアティーチングコンテスト優秀賞、2009 年度外国語教育メディア学会 (LET) 学術賞の各賞を受賞。

本講演では、冒頭で、講演者のこれまでの研究活動の流れを振り返り、なぜ今回、このテーマを選んだかを説明する。その後、動機づけ研究の外国語（英語）教育学における重要性を、2020 年実施の教育改革との関連で説明する。続いて、講演者らの様々な研究をもとに、教室「外」での学びの重要性について言及し、その過程に影響を与える動機づけ要因に関しても概観する。これとの関連で、学習者が、動機づけ要因をどう捉え、知覚しているかについての研究も紹介していく。次に、視点を教員側に移し、学習者の動機づけへの教員の働きかけ（つまり動機づけ方略）に関する研究成果に触れる。また、動機づけとその他の情意要因（学習不安、自己効力感など）、そして L2 習得との関係に、質・量の両面からアプローチした研究を紹介し、今後の外国語教育研究のあり方（たとえば、関心相関性や共約可能性の導入）について述べる。最後に、これから研究を続けていく若手研究者に向けて、トレンドを起こすことの重要性に関して言及し、講演を締めくくる。

17:50-18:00

閉会式（2 階 DW レセプションホール）

司会:　西村 嘉人（名古屋大学大学院生）
挨拶:　田村 祐（外国語教育基礎研究部会 部会長）

18:30-20:30

懇親会

会場:　MU GARDEN TERRACE

〒461-0048 名古屋市東区矢田南 4-102-9 名城大学ナゴヤドーム前キャンパス北館 1F

事務局から

本日のお食事について

本日は、懇親会会場にもなっております会場内の MU GARDEN TERRACE が営業しています。また、最寄りのナゴヤドーム前矢田駅近くのコンビニが営業しています。会場前のイオンモールナゴヤドーム前にもレストラン街があります。また、西館の 1 階には、自動販売機があります。

懇親会について

本日の例会終了後、18 時 30 分より、懇親会を開催いたします。受付にて参加のお手続きをお済ませください。例会終了後に担当者が会場までご案内いたします。

週例会について

学期中の毎週、「週例会」と称して勉強会を開催しており、研究発表や文献の輪読を行っております。今年度は、18 時 15 分より、名古屋大学にて開催しておりました。どなたでもご参加いただけますので、関心のある方は事務局までお気軽にお問い合わせください。

基礎研 Facebook ページについて

基礎研では、Facebook ページを運営しており、週例会の活動報告やイベントの告知を行っております。Facebook のアカウントをお持ちでない方もご覧になれますので、ご関心のある方は、右の QR コード、もしくは下の URL からアクセスの上、「いいね」をお願いいたします。https://www.facebook.com/letkisoken/

基礎研 研究相談フォーラムについて

基礎研では、外国語教育研究についての質問や相談を行う場として、「**基礎研 研究相談フォーラム**」を運営しております。研究内容や研究方法についてお悩みの方なら、どなたでも投稿いただけます。ぜひご利用ください。 http://9326.teacup.com/kisoken_forum/bbs/t1/l50

外国語教育基礎研究部会 報告論集について

基礎研では、年に一回、オンライン上で報告論集を発行しています。今年度も投稿のお申し込みを受け付けます。今年度の投稿締め切りは、3 月 17 日（土）です。投稿にかかる詳細や、投稿規定、テンプレート、および過年度の報告論集は、LET 中部支部サイト上の研究部会ページにて公開しております。
http://bit.ly/Kisoken

一般研究発表

予稿

The Implementation of the Peer-review Activity Focusing on 5W1H Questions An Approach to Improving Students' Writing Performance

Kayo Tsuji
Ritsumeikan University

Keywords: 5W1H questions, peer-review, student writing

1. Introduction of 5W1H Writing Approach

The scholarly writings are required to have clear description so that the audience outside of the writers' culture may clearly understand the content of the papers. The writing texts constructed by Japanese EFL students, however, rely too much on implicit understanding: Their texts lack some required details, or involve some unnecessary information. Consequently, their audience cannot fully understand what has been written in the texts. The descriptions in their second-language (L2) texts require further information regarding the who, what, when, where, why and how of the happening. Focusing more on the need for Japanese student-writers to clearly describe 5W1H elements of information, the author turned to the writing activity focusing on the 5W1H communicative questions. This 5W1H writing activity was introduced in a Project-based English Program (PEP) during the fall semester of 2015.

2. The Classroom-based Study

This pilot study aims in particular to investigate the efficacy of the 5W1H activity on students' writing texts, and identify students' accomplishments through the process. The participants of this study were 14 sophomores at the College of Pharmaceutical Sciences at a large private university in western Japan. The instructor conducted three types of teacher interventions: (a) instructions on what to discuss/write and how to organize their argument in each section, (b) instruction and explanation of how to conduct the 5W1H activity, (c) demonstration of the activity. The activities were done in a pair or a group setting. The participants were provided with 5W1H worksheets in which the key consideration for the activity was summarized. During the activity, the instructor listened attentively to students' discussions, and offered practical advice if necessary. To evaluate the 5W1H activity, the instructor and one independent rater assessed participants' texts before and after the process, using the writing rubric constructed for this study. At the end of the evaluation, they attempted to identify the features of affecting factor contributing to more comprehensible texts.

3. Results and Concluding Remarks

The results showed that the process had positive influences on writing performance of students. All of the participants (N = 14) changed some parts of the original texts. The 13 revisions leading to a better text became clearer with the newly modified 5W1H information. Students who understood the importance of filling the information gap with adequate 5W1H details (n = 7) successfully produced more understandable texts. Their post-texts increased in message clarity. On the other hand, six students understood how a word or reference term should be described more specifically. The students who internalized the importance of word-level clarification described the information more clearly. Therefore, the author concludes that the process did enhance students' writing performance.

言語リズム類型論の変遷と第二言語リズムの測定

天野 修一
静岡大学

Keywords: L1 リズム，類型論，L2 リズム

1.　はじめに

第一言語（L1）と第二言語（L2）の発話リズムを様々な指標の活用によって比較しようをする研究が著しく発展している（e.g., Grenon & White, 2008; Kinoshita & Sheppard, 2011; Lai, Evanini, & Zechner, 2013; White & Mattys, 2007a; 2007b）。このような研究は，もともとは言語リズムの類型研究が形を変えて発展してきたものであるが，そのような研究がいかなる経緯で L2 リズムを分析する指標の研究に結びついたのかについては，必ずしも幅広く理解されているわけではない。そこで，1940 年代頃からの言語リズム類型論の変遷を整理することを通じて，L2 リズムの研究との関係を示す。

2.　L1 類型研究の時代

L1 リズムの類型研究は Pike（1945）による「強勢拍」,「音節拍」という用語とともによく知られている。彼は強勢拍言語では inter stress interval（ISI）の持続時間が一定であるのに対し，音節拍言語では音節の持続時間が一定であると主張したが，実証的検討はなされなかった。Abercrombie（1967）は Pike の分類と用語を引用しただけでなく，世界中の言語がこのどちらかに属するという強い主張をした。

しかし，その主張には懐疑もあった。強勢拍言語として英語，ロシア語，アラビア語，音節拍言語としてフランス語，テルグ語，ヨルバ語の各々3 言語ずつについて，持続時間の実測を行った Roach（1982）は強勢拍，音節拍というリズムの分類は不適当で，単に知覚上の問題かもしれないと考えた。その他，例えばポルトガル語のリズムを扱った Major（1985）もやはり懐疑的であった。Dauer（1983）や Bertinetto（1989）は，ある言語が強勢拍リズムあるいは音節拍リズムを持つように聴こえるのは，その言語の中の特定の音韻的特質の有無によるのではないかと考えた（特に母音の弱化，子音連鎖および強勢）。そして，完全な強勢拍言語と完全な音節拍言語の二分法で考えるのではなく，当該言語ではどちらの傾向が支配的かという観点で捉えることを提唱した。

3.　リズム指標の提案から L2 リズムの測定へ

Ramus, Nespor and Mehler（1999）は複数の ‘interval measure’ を提案し，それらの組み合わせにより，強勢拍リズムと音節拍リズムの区別を捉えることができると考えた。その後，多くの研究がその主張の妥当性を検証し，その過程でさらに多くの指標が提案された（e.g., Barry, Adreeva, Russo, Dimitrova, & Kostadinova, 2003; Dellwo & Wagner, 2003; Dellwo, 2006; Grabe & Low, 2002; Low, Grabe, & Nolan, 2000; Ramus, 2002）。これらのリズム指標の提案以降，言語間あるいは言語内変種間のリズムの違いを，それらの様々な組み合わせによって検証した研究が数多く発表された（e.g., Barry et al., 2003; Dellwo & Wagner, 2003; Lin & Wang, 2007）。そのような流れの中で，同一言語の L1 と L2 の違いの検証にも活用されるようになった（e.g., Carter, 2005; Gut, 2003; White & Mattys, 2007a; 2007b; Whitworth, 2002）。これらの研究は単に L2 への応用であるだけでなく，リズム指標そのものの改善点を浮き彫りにするなどの貢献もあった（e.g., Lin & Wang, 2007）。L1 の言語リズム類型論は，このような過程を経て L2 リズムの研究へと結びついていった。

しかしながら，リズム指標による L2 研究には課題も少なくない。White and Mattys（2007a）は，L1 が L2 に与える影響をリズム指標で解釈することの困難さを指摘し，指標の適切な調整の必要性に言及している。今後は，リズム指標の適切かつ妥当な形での活用に向けた試行錯誤が求められる。